

# 次世代教育への二三の留意点

森 下 龍 浄

## 寺院は如何様に見えるか

ある聾学校の先生の話。「楽ですね、手話を教えてるだけで」といわれたらしい。「何を言う、全人教育ぞ」と憤慨しておられたが、これは寺院社会も同じ。寺院貴族との陰口もきくし、「儲かりまっか」と問われるから、もつと複雑かも。「楽ですね、お経を読むだけで」「何を言う、お経は全人教育ぞ」と言いたいが弱点もある。

檀家などは迷信俗信の会話で、これに対し釈尊・宗祖・高僧の一生をなぞる法話をして終了。たまに道徳系垂訓的説法か偉人伝。俗世間常識に迎合した「禁忌説明」と祈祷。日蓮暦とおふだの配布は日常的。合掌の説明に「手のひらを合わせる、しあ（シワ）わせ」「手の甲と甲だと、ふし（節）あわせ」などなど。

低音で響く社会の要望は「寺よ変われ、僧よ変われ」。なのに法華経を語るでもなく、個々人の「観」や「感」にすぎないものを大上段から語る。とかく上から目線で超越項（お経）から説こうとする。補強材に孔子・聖徳太子・西行・賢治・石橋湛山などと繰り出してもその間をつなぐものがない。今や「住職の人生観は」「散骨は」「ガン告知は」「菩提寺変更は」「位牌とお墓は絶対必要か」などと全方位の覚悟を問われる時代。いやが上にも対応と即答は避けられない。僧個々人の人生観の再構築が求められている。

## 次世代育成にはぜひとも死生学

そこへいくと、俗人は多様な実人生ウオッチングと倫理学をはじめ諸学の積み重ねを土台としてアプローチしていく。人生観・死生観を多方面から語り、人間に横の広がりや深まりをみせる時、それを死生学というらしい。

そんな中、宗門緊要の次世代教育というと信行道場五十日・百日説、道場改革・新規カリキュラムとかのテコ入れが聞こえてくる。だが、ことはそう簡単ではない。人生観の変革を迫られる意識改革なので、お祖師さまのお示し「まず臨終のことを」が先にくるべきで、物理的テコ入れはその後のことではなからうか。総合的な人間学ととらえて、死生学に眼を向けてみようではないか。

## 人生観・死生観・死生学

死生観といえは「終活、死の瞬間、死後のこと。枕元に子供を集めて最期の別れを。病院はいや、畳の上で死にたい。お盆にはみんな集まって」などを思い浮かべよう。だが、そんな単純なこと？

四季の移り変わりのように、秋にはすでに冬の気を含み、生はすでに死の兆しを含む。死のまさに終わらんとするところに生の継がりを見る。周囲の人々の心の中に思い出という形で生き続ける、それはその人の命の連続であると考えたいのではないか。死そのものも生命現象。死もいのちという捉え方。人生を死において完成させること。そこに、死の悲しみや死を想像する苦しみを乗り越えるキッカケがあるとす「精神世界」もある。

## 如何様に見るかの死生学

さて、年来気になっている歌が二つある。千の風に「そこに私はいません。眠ってなんかいません。あの大きな空

をふきわたって、「とつづく。「そこにはいません」のところが波紋を広げた。墓をないがしろにしている、などとある県の某宗派寺院連合はこれを葬儀場BGMに使わないように申し入れをしたものの、数年後には「墓参り減少にはつながらなかった」撤回したという。そのいきさつはすっかり人々に見られた。こうした死生観を諸学の知見も交えて宗派内で議論したら、立派に死生学を学ばれたことになったろうに、惜しい。

いま一つは真白き富士の峰。三番にある「みたまよ何処に迷っておわすか、帰れ早く母の胸に」。ここは「御霊・いづこ・迷い」が要注意ポイント。「いづこに迷う」とは、この水難事故からして日本人大多数の感傷だろう。しかし法華経はどうか。事故死の霊は迷っているのか。

個々人の死生観を披瀝し、人生観・生きざま・お経の読み方・靈魂のありかへとふくらまして議論したい。

## 自殺を如何様に見るか

例えば自殺をどう受け止めるか。いのちを粗末にしてはならぬ。しかしその人の「究極の選択」をどのように受容しよう。注意が必要なのは説法の場合。普通には「いのち大切に。粗末にするな」が問題になることはない。お経の最重要度メッセージだろう。だが、自殺してしまったら。自殺者とその周囲の人々の前ではこれが禁句となる。「いのち大切に」が「ほら、粗末にしたでしょう」と非難の言葉になるからだ。

「それぞれの事情・理由で、ほかの道は見えずつからず、本人の弱さも加味した」かもしれないのに、命を断つた人には酷としかいいようがない。「その決断は容認」するの他はない。すでに死んだ人は、誰の中に生き続ける。その人生は誰に継承される。生の世界は死の世界のただ中にあり、死の世界は生の世界のただ中にあり、とはこのことといえる。生き残る者の生き抜き方と死に行く者の想いをつなげて考えようとする時、そこはもう死生学の世界。

終活のずっと手前から考え始め、そのずっと先までを視野に考えていけば、有意義な人生になるし、それが自分の

人生を「人として生ききる」の中味かもしれない。たえず死を思い己の価値観や死生観の見直しをしたい。

## 人生を生ききる

二〇一六年・死の臨床研究会札幌宣言に「最期の時まで、希望する生き方を実現しよう。させよう」とある。死の床に伏す人にも本当に大切なことを求める自由、その人の意思決定を支援し表明できるように環境を整えようというアピール。絶望に寄り添う、死の看取りの学、「死に向かう生」のケア学。出発点も到達点も「生の学」であり、どうしたら自分の人生を「生ききる」ことができるか。「生」をとことん見つめる学なので、深まり行く「生」にそっと投げ入れる触媒が死・死生学ととらえられよう。もともと死は語り得ぬもの。そこを語るには生からアプローチするしかない。終活など、断捨離をも彷彿とさせて法華経布教の場にはまったくもの足りないのである。

## 第二点・寺院世界のアキレス腱は

では注意点第二位にして緊急性第一位とは何か。

「未信徒教化」「我が家の宗旨」。普段は気にもしないこの二つが対峙する時がある。布教の効果ありて「ワシはお上人さんとの檀家になりたい」と来たとする。どっぷり世俗的だが推測してみる。未信徒なら当然のこと即OKだろう。他寺信徒に二種あり、一つは他宗、いま一つは本宗。この場合も他宗から入信は問題ナシ。超やっかいなのは「本宗寺院間での移籍問題」。

行くも追わず・来るも拒まずの態度も、当然ある。苦悶しつつ考えるべきは「盗った」「盗られた」の応酬。この処理を誤ると、寺院社会の奥の奥、醜い部分をさらけ出すことになるので、離れた人心は戻ってこないと見なければならぬ。しかもそれらのいきさつは尾ひれを付けて人の口から口へ、社会に広く広く伝播していく。

その時の檀信徒の心はどのようなものか。「盗った盗られたと、ワシらを物扱い?」「寺院間で談合して移動を認めないのは納得いかぬ。もう愛想が尽きた。他宗に行く」「信教の自由は憲法に保証されているはず」etc。つまり足をすくわれる仕儀となる。なんともはや、世をはばかり論になってしまった。崩れてはならない寺院共同体としては、法華経我土安穩を思えば、このような事態を想定し、一定の手順を考えておくべしと提案したい。全国どこかで今も発生している困惑事態である。緊急性アリと思う。

### 今後を如何様にすれば

寺院間がこれほど固定的で移動の壁が突破できぬとなれば、未信徒布教を掲げて社会に出ようとする「有為の新進気鋭次世代僧侶の布教意欲」が削がれることとなろう。「日蓮宗ミトラサンガ」からもうすうす感じとれる。ことは現役世代の矜持、人生の基本姿勢と密接につながる。伝道宗門と謳い、社会へ社会へと叫び、死身弘法を多用している我々。南無妙法蓮華経はこれでいいのか。ご本尊・お祖師さまが苦笑いでお済ましになられるだろうか。

すでに地歩を固めた寺院からの「うちを荒らすなよ」のささやきも、「所長・宗会議員を経験し、もう何もするところが無い、あ、あ、あ、」も、「権大僧正ほしい」も、ひとつの人生観ではある。このような閉鎖系宗門内議論を、外圧からとはいえ、開放系に衣替えして研鑽する時、それまでのもの見方がシャッフルされて新発見があるだろう。それで脱皮できるかもしれない。まず急務の二点を提示してみた。なんとすれば「うちを荒らすなよ」と言ったとたん閉鎖系を離れて寺院・檀家相互乗り入れ交通系になってしまったのだから。